

平成30年度 全国学力・学習状況調査における

北九州市立 筒井 小学校の結果分析と今後の取組について

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、平成30年4月17日(火)に、6年生を対象として、「教科(国語, 算数, 理科)に関する調査」と「児童質問紙調査」を実施いたしました。

この度、本年度の調査結果を分析し、今後の取組についてまとめましたので、お知らせいたします。

学校の現状を知っていただくとともに、ご家庭での取組の参考にさせていただきたいと思っております。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部分であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。本校では、他の教科等も含め、総合的に学力向上を目指しています。

1. 調査の目的

- (1) 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) 学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- (3) そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2. 調査内容

- (1) 教科に関する調査(国語, 算数, 理科)

主として「知識」に関する問題(A)	主として「活用」に関する問題(B)
・身につけておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容	・知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力
・実生活において不可欠であり、常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能	・様々な課題解決のための構想を立て実践し、評価・改善する力

※理科については、主として「知識」に関する問題と主として「活用」に関する問題を一体的に問う。

- (2) 児童質問紙調査

児童質問紙調査
○学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査

※本校の6年生については、単学級ですので、個人が特定されないように公表の方法については、配慮しています。

3. 教科に関する調査結果の概要

(1) 全国・本市の学力調査(国語A・B, 算数A・B, 理科)の結果

本年度の結果	国語A		国語B		算数A		算数B		理科	
	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率
本市	8.5	71	4.3	54	8.6	61	5.0	50	9.6	60
全国	8.5	71	4.4	55	8.9	64	5.1	52	9.6	60

(2) 本校の学力調査結果の分析

国語A	全体的な傾向や特徴など	全ての領域で全国平均正答率を上回っており、無解答率も低かった。特に、話すこと・聞くことや書くことについての問題の正答率が高かった。
	よってきた問題	図書館への行き方の説明として適切なものを選ぶ問題や、慣用句の意味や使い方として適切なものを選ぶ問題の正答率が高かった。
	努力が必要な問題	主語と述語の関係に気をつけて文を正しく書く問題や、相手や場面に応じて適切に敬語を使う問題で正答率が低く、課題がある。
国語B	全体的な傾向や特徴など	全体的には全国平均正答率を上回っており、無解答も少なく、粘り強く問題に取り組んでいた。書くことの領域の記述式は正答率が低かった。
	よってきた問題	目的や意図に応じて文章全体の構成の効果を考える問題の正答率が高かった。
	努力が必要な問題	話し手の意図を捉えながら聞き、自分の意見と比べるなどして考えをまとめる問題や、目的や意図に応じ、内容の中心を明確にして詳しく書く問題で誤答が多かった。
算数A	全体的な傾向や特徴など	「数と計算」「図形」「数量関係」の3つの領域で、全国平均正答率を下回っており、課題である。
	よってきた問題	角の大きさを正しく求める問題の正答率が高かった。
	努力が必要な問題	小数の除法の意味や円周率の意味について理解しているかどうかをみる問題の正答率が低かった。
算数B	全体的な傾向や特徴など	全体的には、全国平均正答率を上回っていたが、図形領域の問題の正答率が低かった。
	よってきた問題	示された数量を関連付け、根拠を明確にして式や言葉で記述する問題の正答率が高かった。
	努力が必要な問題	図形領域の問題や、棒グラフと帯グラフから読み取ることができることを適切に判断する問題の正答率が低かった。
理科	全体的な傾向や特徴など	全体的には、全国平均正答率とほぼ同程度であった。主として「知識」に関する問題の正答率が高かった。
	よってきた問題	骨と骨のつなぎ目や、堆積作用について科学的な言葉や概念を理解しているかどうかをみる問題の正答率が高かった。
	努力が必要な問題	実験結果を基に分析して考察し、その内容を記述する問題や複数の情報を関連付けながら分析して考察する問題に課題があった。

4. 学校での学習活動、家庭での生活習慣等に関する質問紙調査結果の概要

質問紙調査の結果分析
<ul style="list-style-type: none"> 自分の考えがうまく伝わるように工夫して発表したり、話し合う活動で自分の考えを深めたり、広げたりすることに課題をもっている児童が多い。 「宿題をしている」と回答した児童の割合は高いが、「自分で計画をたてて勉強している」と回答した児童の割合は全国平均と比べると低い。 「毎日決まった時刻に寝る・起きる」「朝ご飯を食べる」と回答した児童の割合は高く、基本的な生活習慣がきちんと身に付いていると考えられる。 家庭での学習時間が1時間以上と回答した児童の割合は約3割と低く、放課後テレビやビデオ、携帯、インターネット等に費やす児童が9割近い。家庭での過ごし方について家庭との連携や啓発をさらに進めていく必要がある。 「自分にはよいところがあると思う」「将来の夢や目標をもっている」の項目に肯定的回答をした児童の割合は全国平均よりやや低いが、「人の役に立つ人間になりたいと思う」の項目に肯定的回答をした児童の割合は高い。

5. 調査結果から明らかになった、課題解決のための重点的な取組

① 教科に関する取組(全校で・学年で・学級で)

<ul style="list-style-type: none"> ○基礎的・基本的な知識・技能の確実な定着を図る。 ・朝の活動「チャレンジタイム」では、曜日ごとに内容を決めて全校一斉に同じ取組を継続して行う。(月曜日:算数、火曜日:読書、水曜日:計算、木曜日:造形タイム、金曜日:音読・視写) ・学力定着サポートシステムを活用し、児童のつまずきを分析し指導に生かす。 ・お互いの意見を出し合うことで自分の考えを深められるよう、学習の中に「話し合い活動」を位置付ける。 ・授業の終末で児童が学んだことを振り返ることができるよう、教師が「振り返り」の時間を確保する。
--

② 家庭生活習慣等に関する取組

<p>家庭学習の充実</p> <ul style="list-style-type: none"> ・家庭学習は概ね定着しているので、今後は自主学習により一層取り組むよう、よい取組のノートの掲示等を行い、自主学習への意欲を高める。 <p>メディアとの接触時間の再考</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1日の生活の中でのテレビやビデオ、携帯やスマホに費やす時間について見直すよう、学校だよりや学級通信、懇談会等で保護者の協力を呼びかける。 ・携帯・スマホの使い方については、いじめ防止と関連させ、児童と保護者が共に学ぶ「ネットによるいじめ防止」講演会を開いたり、学校だよりで知らせたりして保護者へも啓発を行っていく。
